

染繪花籠圖 解説

神奈川 安田 靱彦氏藏

一鋪の絹布に繪と表装を染畫して一幀を成す。圖は馥郁たる菊花數株を雅致ある籠に盛つたもので、その布置の要を得たるは微塵の動きも許さざるもの、又花の配置は華道に於ける妙を示すものとも云ふべきか、誠に巧を極めたるものにして、この二つに先づ作者の才の並々ならぬを視ふのである。

これに白、赤、青、緑、金等の賦彩を施す、その色すでに麗しいが、更に精妙なる技によつて、或は花の部分に色調の巧麗をいや増し、或は葉、籠の部分には一種の澁味ある色調を示す等、多様に工夫を凝らしてゐる。しかもこの種のものに得て陥り易い低調なる趣味に趨くこともなく、その畫のいよゝ潤美なるを見るのである。これが技法は初め畫の輪廓を防染糊の如きもので描き置き、其の上に筆にて彩色を施し、更に防染材料を除去して作れるものと思はれる。

表装は上、下地題は黄褐色地に紫陽花を上代唐草文風に化し暗綠色をもつて型染し、中縁は黄綠色を地とし唐花菱文を暗綠色にて型染なし、又一文字、及風帯は褐色地に桐文を抜いたものにして品あり落着いたものである。

本品、繪と表装誠によく融合し澁味ある表装は優麗なる繪の畫格を高からしめ、その佳麗なる嘆賞の他はない。

所謂友禪染はその名の如く宮崎友禪齋の創始する所と傳へられてゐるが友禪その人については今日では詳細に知り得る所がなく、本品又友禪齋作の傳稱を有するが固より確證を求め難い。今姑く友禪齋その人を離れて友禪染の創始發達を考ふるに京都、加賀種々説の存する所であるが、享保前後には既に兩地に於て優秀なる製作を見たりしものと思はれ、又かかる染繪挂物も製作せられて

るた如くであり殊に博物館藏の紫式部圖のものには、享保伍庚子六月十五日於加劔御門前町染所茂平の染拔落款あり、其他加賀染業關係の記録により加賀に於ては享保の始めに既に製作せられ、以後も可成作られて居たことを知り得るのである。併し今本品については何處の製作になるか容易には定め難く、製作年代については他の遺品と比し又畫趣等より推して、やはり享保頃の産と思はれるのである。

釋教卅六人歌仙圖殘闕（西行） 解説

東京 加藤 正治氏藏

釋教卅六人歌仙は勸修寺僧正榮海の撰するところと認められるが、數種の異本があり、繪卷としても、現在注目すべき二本が知られてゐる。一は帝室博物館所藏の摸本であつて之には歌仙像に添へて歌意を表はした自然景が畫かれて居り、他は佐々木信綱博士及諸家に分藏せられる殘闕本であつて、之には歌仙像のみが描かれてゐる。之等諸本に關する一通りの考察は既に本誌第九十三號に載せたから今は省略するとして、茲には新たに發見された一殘闕を紹介することにする。

挂幅装、豎二八糎、横二〇糎、全紙に虫損の痕を留めてゐる。但し淡墨を以て、磊落に即興風に畫かれた像は左程畫趣を損せらるゝことなく、入墨は右眼に於て僅かにそれと氣付かれる程度に過ぎない。肉身の描線に沿へた卒略なる俗緒の線と唇に點じた朱色は畫面に一種古雅なる味ひを深めるに役立つてゐる。向つて右上に「西行法師」、左側に「ふりつみし高峯の御雪とけにけり清瀧川の水のしら浪」と歌をします。（此歌は新古今第一卷に「春の題」として載せられてゐる）その態樣全く常信縮圖本と合致するものであり、又すべての點で此の殘闕が佐々木家藏本の分れであることは疑ひを容れない。

たゞこゝに此の西行像の發見に關して留意せらるゝのは既に世にその存在を知られた斯本殘闕がすべて此繪卷の初頭の部分に位するに反して、此の西行像は二十八番目に位することであつて、斯本殘闕の更に發見せらるゝ可能性を暗示するものゝ如くである。

美術研究所時報

東洋美術國際研究會の設立

この程、世界に於ける日本及東洋美術の研究を進め美術上の國際聯絡及協力を図り併せて日本文化の海外宣揚及國際親善に貢獻せむとの趣旨を以つて、文部、外務兩當局の後援のもとに、東洋美術國際研究會が設立された。差當つて美術研究所に事務所を置き、會長侯爵細川護立氏、理事長伯爵樺山愛輔氏以下の役員を決定すると共に、左の事業を行ふこととなつた。

- 一 講演會及展覽會の開催並に連續講義の開設
- 二 外國人の研究及見學指導
- 三 著述、編纂、翻譯、出版並に定期刊行物の發行
- 四 海外研究機關との聯絡及協力
- 五 海外に對する出版物の頒布、寄贈及交換
- 六 其他適當と認められたる事業

尙本會は二月二十日華族會館に於て發會式を舉行し、當日公爵毛利元道氏藏雪舟筆山水圖卷、侯爵蜂須賀正氏藏紫式部日記繪卷、男爵團伊能氏藏光悅宗達合作歌の卷、以上三點の特別展觀をなしたる所多數の來會者あり、盛會であつた。

寄贈圖書

芋錢子遺作畫冊 一帙
尺貫法存續聯盟記念展觀六十五品 一帙
前田本中務集 一函
福田平八郎 一冊

小川こう氏
尺貫法存續聯盟
前田育徳財團
美術春秋社

寄贈雜誌

| | | | |
|--------|--------|--------|-----------|
| 美術世界 | 四ノ一 | 汎工藝 | 一八ノ一 |
| 學校美術 | 一四ノ一 | 美之國 | 一六ノ一 |
| 美術日本 | 五ノ七 | 美術評論 | 八ノ七 |
| 教育美術 | 六ノ一 | 南畫鑑賞 | 九ノ一 |
| 圖畫と手工 | 二四三 | 最高美術 | 九ノ一 |
| 文學 | 八ノ一 | 國際建築 | 一六ノ一 |
| 貨幣 | 二五〇 | 新建築 | 一五ノ一二 |
| 東方美術 | 五 | 圖書館雜誌 | 二四二 |
| 畫觀 | 七ノ一 | 旬刊美術 | 一ノ二、二ノ一、二 |
| 美術グラフ | 九五 | 工藝ニュース | 九ノ一 |
| 海外之日本 | 一四ノ一 | 美術殿 | 八ノ一 |
| みづゑ | 四二二 | 陶磁 | 一一ノ四 |
| 國際文化 | 七 | 國寶 | 三ノ一 |
| 畫說 | 三七 | 興亞書報 | 二ノ一 |
| 思想 | 二二二 | 美術作家 | 一 |
| 帝國圖書館報 | 三三ノ五、六 | 畫室 | 七ノ一 |